Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語の「のだ」とスペイン語のes que及びその類似表現の対照研究ー意味機能地図の作成を目指してー
Author(s)	Mayor, Rodriguez Jorge Daniel
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96180
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　マジョール　ロドリゲス　ホルヘ　ダニエル　）	
論文題名	日本語の「のだ」とスペイン語の*es que*及びその類似表現の対照研究―意味機能地図の作成を目指して―

論文内容の要旨

マジョール(2021ab)では、日本語の「のだ」との対応性が高く、使用できる場面が多い*es que*(esは連辞動詞3人称単数現在形、*que*は名詞節を導く従属接続詞)*, y es que, y, pues, acaso*の五つの類似表現を中心に考察し、それらが「のだ」とどのような対応関係にあるかを明らかにする研究に取り組んだ。しかし、「のだ」には、他に「のだった」、「のだろう」、「のではない」のような活用形が存在し、「のだ」とは異なる意味機能を表すことがある。同様に、スペイン語の*es que*も活用形が存在する。

そこで、本論文では、日本語の「のだ」の活用形（「のだった」や「のだろう」、「のではない」）の意味機能を*es que*の活用形（*fue* (点過去形)*que/era*(線過去形) *que* , *será que*（未来形）*/sería que* (過去未来形)、*no es que*（否定形））がどのように対応するかを明らかにするともに、「のだ」と*es que*、その活用形、そして、スペイン語の類似表現の意味機能のネットワークと各表現が持つ意味の領域を示す意味機能地図（セマンティック・マップ）を作成し、「のだ」と*es que*の対応関係の視覚化を目的とする。

本論文の構成は以下の通りである。まず第1章では、研究の背景を述べ、先行研究を概観しながら、本論文の目的を示す。第2章では「のだった」と過去形の*fue que/era que*との対応、第3章では「のだろう」と未来形*será que*・過去未来形*sería que*との対応、第4章では「のではない」と否定形の*no es que*との対応を中心に考察する。次に、第5章では、*es que*の類似表現を日本語の「のだ」の活用形（「のだった」「のだろう」「のではない」）と比較し、その意味機能・統語論的対応関係を考察する。そして、第6章では、マジョール (2021ab) での結果も含め、「のだ」と*es que*及びその類似表現（無標文を含めて）、そして、それらの活用形の意味機能の分布や派生に関するネットワークとその中で各表現が占める領域を示す意味機能地図（セマンティック・マップ）を提案する。

第2章では、「のだった」の意味機能のうち、*fue que/era que*は「事情説明・関係付け」だけを表すことが明らかになった。それ以外の「のだった」の意味機能、すなわち、「過去における現在または過去（大過去）」、「想起」、「物語の締めくくり」は、スペイン語では動詞の活用形、具体的に、直説法線過去、点過去、過去完了、過去未来によって表現できること、そして、「後悔」については、*tener que*とう表現で伝えることを明らかにした。なお、スペイン語の*fue que*と*era que* は*que*節の動詞の過去時制に連動して、*es que*が点過去線過去になったにすぎないことを指摘した。すなわち、*que*節内の動詞が点過去形の場合に*fue que*が、そして当該の動詞が線過去形ないし過去完了形の場合に*era que*にすることができる。ある種の「時制の一致」と言えるだろう。それゆえ、*fue que*と*era que*との間に意味機能の差がないこともわかった。スペイン語の直説法過去未来には物語を締めくくるという用法があり、日本語の「のだった」にもあることが判明した。従来指摘されていないその用法を「のだった」の新しい意味機能として提案し、それについてもあらためて*fue que/era que*などと比較して考察した。

第3章では、「のだろう」との対応において*será que/sería que*はその意味機能が限定されていることが明らかになった。具体的には、*es que*から「継承」した「解釈（理由・原因の推測）」の意味機能、すなわち「事情推量」と疑問文における「疑念・心配」のみ表すしか表さない。この二つの意味機能は、動詞を直説法未来形や過去未来形にした無標文でも伝えることができる。一方、「のだろう」の疑問文での意味機能「確認」を*será que/sería que*や無標文は持たず、これは*cierto que*という表現を用いる必要がある。なお、未来形の*será que* と過去未来形の*sería que*の使い分けは、*es que*と*fue que/era que*との使い分けと同じである。すなわち、*que*節内の動詞が過去の場合、*será que*を*sería que*に言い換えることができ、この二つのスペイン語の表現の間に意味機能の差はない。

第4章では、「のではない」と*no es que*の対応を考察した結果、*no es que*は既に述べられた事柄に誤りがあることを示す「誤った解釈の提示」と「相互除外」の意味機能を持つが、疑問文の「のではない（か）」が持つ「推定」

の意味機能を示すことができない。また、no es que同様、「誤った解釈の提示」と「相互除外」の意味機能には、無標文を用いることもできる。一方、n*o es que*が持たない「推定」の意味機能は*No será que/ no sería que*や直説法未来形・過去未来形の否定疑問文で示すことができることを明らかにした。

第5章では、*es que*とその類似表現が「のだ」の活用形（「のだった」と「のだろう」と「のではない」）とどのように対応するかを考察した結果、次のようなことが明らかになった。現在形の肯定の*es que*の使用範囲は広い。これは、*fue que/era que*、*será que/sería que*、*no es que*の「基本形」だからだと考えられる。ただし、それぞれの活用形がもつ時制や法を欠いているため、日本語の「のだ」と活用形との意味的対応が*fue que/era que*、*será que/sería que*、*no es que*よりは弱いものが多い。また、スペイン語の無標文は、日本語の意味機能の多くを表すことができることが分かった。これは、日本語では、「のだ」（の諸形）が必要な場合でも、スペイン語ではその意味を何らかの表現を用いて明示的に表さなくてもいいということを示している。ただし、「のだ」の活用に応じて、スペイン語では無標文の動詞の活用を変える必要がある。これは、スペイン語から日本語を見ると、日本語の「のだ」はスペイン語の時制に相当する機能の役も担っていることを示唆する。一方、他の類似表現は使用範囲が限られていることが明らかとなった。類似表現のほとんどが「事情説明」に関わる意味機能に限定されているためだと考えられる。また、*y es que*と*y*は、疑問文にしか生起できないため、平叙文の「事情説明・関係付け」を表現できないのに対し、平叙文でも使用できる*pues*は対応を見せた。一方、*acaso*も疑問文にしか生起できないが、元来が「多分、もしかしたら」のような蓋然性の意味があるため、疑問文かつ推量と関わる意味機能では、対応させることができる。

第6章では、日本語の「のだ」とその活用形、スペイン語の*es que*とその活用形、*es que*の類似表現の各形式がどの意味機能をその領域として占めているかという観点から、意味機能の「分布」を示すネットワークを明らかにするために、意味機能地図（セマンティック・マップ）の作成を試みた。これまでの議論で提示された表は、「のだ」の諸形式のそれぞれの意味機能が*es que*などの諸形式とどう対応するかを示すに留まり、それらの意味機能が相対的にどのように「分布」しているかが見えない。「分布」というのは、意味機能の間にある派生関係や近接性などの繋がりを示すネットワークである。本章では、そのようなネットワークを可視化し、マジョール (2021ab) および本論文で考察した表現形式の領域を重ねて描いたものとして意味機能地図を提案した。意味機能地図の作成に際しては、「のだ」や*es que*などの諸形式が各々どの意味機能を持ち、どの意味機能を持たないかということが基盤となる。それぞれの形式が担う複数の意味機能は無関係に散らばっているのではなく、相関しているはずである。それゆえ、「のだ」とその諸形がそれぞれもつ意味機能をその派生関係をもとに結びつけて配置し、それらに対し全ての表現形式がそれぞれ一つの領域を描ける場合、当該の配置は意味機能のネットワークとして妥当性が高いと考えられる。このような考えのもと、時制・叙法や文型（平叙文、疑問文、否定文）ごとに意味機能地図を作成した。意味機能地図を作成した結果、次のようなことが分かった。*Es que*またはその活用形が「のだ」とその諸形の意味機能の一部しか持たない場合、その意味の領域が「のだ」とその諸形の原義とそれに近い派生的意味のみに留まっているものがある。*es que*またはその活用形とは異なる意味機能を占有する、または共有する意味機能も持つ類似表現がある。異なる意味機能だけでなく、同じ意味機能を持つ*es que*（その活用形を含む）と類似表現について、それぞれ一つの領域を形成するためには、「のだ」とその諸形の意味機能のネットワークとして、原義から始まる別系統の派生関係を想定する必要がある場合もある。一方、*es que*またはその活用形では表すことのできない意味機能を内包し「のだ」の中心的意味から離れた意味の領域を占めている類似表現もある。それは、スペイン語は、日本語の「のだ」とその諸形の周辺的な意味機能を“具体的な”表現で明示的に表す必要があると思われるからである。同じく、*es que*またはその類似表現またはその活用形では表すことのできない意味機能を内包・占有するスペイン語の時制もあり、その意味の領域が*es que*またはその類似表現またはその活用形のものと相互接続していない場合もある。今回、提案した地図は試行的な面があるが、日本語の「のだ」とスペイン語の*es que*および類似表現が担う意味機能について、今後、研究を深めていくための基盤的概略図になると考えられる。

第7章では、本論文の研究によって明らかになったことをまとめるとともに、そこから見えた日本語とスペイン語が用いる文法的手段の違いについて見解を述べた。まず、「のだ」に「のだった」「のだろう」「のではない」の活用形があるのと同じように*es que*にもそれらと形式上類似する活用形（過去形、未来形、否定形）があり、それらは、部分的ではなるが、「のだ」の活用形と意味的にも対応することが明らかとなった。また、「のだ」の活用形の意味機能に対応しない場合、時制を頼りにすれば、スペイン語の無標文でそれらを表すことができることが明らかとなった。一方、現在形の「のだ」との対応では、*es que*よりも「活躍」することがあった類似表現は、「のだ」のその他の活用形における意味機能については、使用範囲がかなり制限されていることがわかった。

スペイン語では、日本語の「のだ」の意味機能に対応するために、*es que*だけでなく、類似表現、*es que*の活用形

やテンス・アスペクト・ムードを内包する動詞活用形式など、様々な表現手段が存在する。それに比べ、現代日本語の動詞の「活用形」は、ル形（する）やタ形（した）ぐらいしかなく、“貧弱”であると思われる。日本語では、それ以外のテンスやアスペクトやムードは、補助動詞やモダリティ表現などによって迂言的に表現する必要がある。「のだった」や「のだろう」もその表現手段の一つだと考えられる（cf. 三上1953、1963）。*es que*の活用形（現在形、否定形、過去形、未来形）が占める意味機能の領域は、「のだ」と比べると小さい。それは、日本語では「のだ」が必須の場面・文脈であっても、スペイン語では、テンス・アスペクト・ムードを内包する動詞活用形式が豊富に存在するため、わざわざ*es que*とその活用形及びその類似表現を用いなくても、ニュアンスの違いがあるものの、「のだ」の意味機能を表すことができるからだと指摘した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名	（ MAYOR RODRIGUEZ, JORGE DANIEL ）	
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	岸田　泰浩
	副 査　教 授	長谷川　信弥
	副 査　教 授	小森　万里
	副 査　教 授	荘司　育子
	副 査　准教授	山川　太

論文審査の結果の要旨

審査対象論文は、形式的に類似した構成を持つ、日本語の文末表現「のだ」とスペイン語の表現 *es que ...* が意味的にどのように対応するかを論考したものである。日本語の「のだ」については多くの研究があるが、スペイン語の *es que* に関する研究は多くない。また、両表現を対照させた研究も極めて少ない。その中で、申請者は修士論文において両表現の意味的対応を明らかにした。本審査対象論文はその研究を進展させるべく、「のだ」の諸形「のだった」「のだろう」「のではない」を取り上げて、それに対応する *es que* の諸形（活用形）と比較し、それらの間に見られる意味的対応を詳細に考察した初めての試みである。また、両言語における意味的対応の視覚化を試みた意味機能地図（セマンティック・マップ）は斬新な提案であると言える。

審査対象論文は七つの章から構成されている。第1章では、研究の背景、先行研究の概要、本論文の目的が示された。続く、第2章では、「のだった」とそれに形式的に対応するスペイン語の *fue que/era que*（各々*es* の直説法点過去形と線過去形）を比較し、前者が有する５つの意味用法のうち、後者が「事情説明・関係付け」の意味しか示さないことを明らかにしている。さらに、「のだった」の他の意味のうち、「過去における現在または過去（大過去）」、「想起」、「物語の締めくくり」はスペイン語では動詞の活用形によって、そして「後悔」の意味は *tener que* によって伝えられることが論じられた。第3章では、「のだろう」がもつ３つの意味用法のうち、「事情推量」と「疑念・心配」（疑問文）は形式的に対応する *será que/sería que*（各々*es* の直説法未来形と過去未来形）でもって表すことができるが、「確認」（疑問文）は表せないことを明らかにした。そして、「確認」の意味を伝える手段としてスペイン語では *cierto que* という表現が利用できることを指摘している。第4章では、否定文の「のではない」と *no es que* の対応を考察し、「のではない」が持つ３つの意味のうち、*no es que* は「誤った解釈の提示」と「相互除外」の意味を示すことができるが、疑問文の「のではない（か）」が持つ「推定」の意味は、*no es que* ではなく、*será que/sería que* や動詞の直説法未来形・過去未来形の否定疑問文で示すことができることが論じられた。そして、第5章では、*es que* と類似した意味を持つスペイン語の表現 *y es que, y, pues, acaso* を取り上げ、「のだ」の諸形が持つ意味とどのように対応するかを考察した結果、その対応は限定的にしかすぎないことが示された。一方で、日本語の「のだ」とその諸形が持つ意味の多くをスペイン語においては *es que* やその活用形を用いずに動詞の活用形のみで示すことも可能であることが論じられた。第6章では、申請者の修士論文も含めて考察対象とした日本語の「のだ」とスペイン語の *es que* の諸形式や類似表現が持つ意味の派生関係や近接性などの繋がりを示す意味的なネットワークを明示し、また、各々の形式や表現がその中で占める領域を可視化する目的で「意味機能地図（セマンティック・マップ）」が提案された。

審査対象論文は次の点で評価できる。一つめは、日本語の「のだ」の諸形とスペイン語の *es que* の活用形を詳細に扱った初めての対照研究であること、二つめは、「のだ」と形式的に類似する *es que* に限定せず、意味的に類似するスペイン語の他の表現も含めて幅広く考察したこと、三つめは、その結果、「のだ」や *es que* の“現在形”のみを対象にした従来の研究では見落とされてきた両言語の相違点を明らかにしたこと、そして、四つめは、意味機能地図の作成を試みたことである。このように全体的には高く評価できるものの、個別の分析に目を向けると、緻密さに欠ける面があることも否めない。日本語の「のだ」（の諸形）とスペイン語の *es que*（の活用形）自体が同じ意味を担っているかどうかを慎重に考察すべきところを、日本語の原文とスペイン語の翻訳文全体が意味的に同等であるかどうかを判断の基準にしているのではないかと思われるものもあり、論証が十分になされたとは必ずしも

言い難い。意味機能地図については斬新な試みとして一定の評価はできるものの、意味の派生関係の妥当性などについて検証が不十分である。さらに、誤字も少ないとは言えず、議論に影響を与えるものもあることは不注意と言わざるをえない。しかしながら、いくつかの個別の瑕疵によって本審査対象論文の価値が大幅に損なわれるものではない。

本審査対象論文は日本語の「のだ」とスペイン語の *es que* を初めて広範囲に考察した研究として評価できる。さらに、スペイン語の *fue que* と *era que*、そして、*será que* と *sería que* の形式的な使い分けを明らかにした点などはスペイン語研究に対する学問的貢献となると評価したい。また、直説法線過去に「想起」の用法があるなど、スペイン語の動詞活用形が「のだ」の諸形の多くと意味的に対応するとの指摘は、スペイン語の動詞活用形の豊かさをあらためて認識させるとともに、三上（1953）が主張するように「のだ」と「のだった」が時制の一種であることの傍証にもなるだろう。

以上のことから、本審査委員会は、対象論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与する水準に達していると判断し、合格との結論に至った。